



Title	アジア太平洋論叢 第22号 編集後記
Author(s)	
Citation	アジア太平洋論叢. 2020, 22, p. 87-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95061
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

編集後記

『アジア太平洋論叢』編集委員会

本号には、日本学術振興会グローバル展開プログラム「国民国家型の大学歴史教育をグローバル化時代に適応させる方法に関する国際比較」（代表：堤一昭、2016年10月－2019年9月）の成果発表のため、2019年8月5-6日に大阪大学で開催した、国際ワークショップ"Globalizing University History Education: Diversity, Trans-borders and Intersectionality" に提出されたペーパーの一部を収録することができた。

会議では、シンガポール、ベトナム、韓国、中国、ドイツおよびアメリカ合衆国から9名の歴史家、歴史教育専門家をお招きし、大阪大学歴史系の教員が重点的に取り組んできた、大学の歴史教育刷新の事例紹介も含めて、活発な議論が展開された。いずれの地域でも、いかにして歴史教育の魅力を高め、社会に貢献できるのかが問われており、国際的な協力を深めて、新たな実践モデルを提示することが不可欠であるとの課題を共有できた。今後も、こうした国際連携・協力を強化していきたい。

最後に、プロジェクト代表の堤先生、「小特集」として本号への掲載をご快諾いただいた宮原先生の御尽力・御協力に、厚くお礼申し上げます。（秋田茂）

大阪外国語大学の研究者が中心となって発刊してきた『アジア太平洋論叢』が継続することになりました。電子ジャーナルとして再発する今号には、阪大文学研究科の秋田先生・桃木先生が中心となって開催した歴史教育に関する国際シンポジウムの成果が特集として組まれています。大阪外国語大学は大阪大学と2008年に統合して新しい伝統を育てておりますが、このたびの『アジア太平洋論叢』新装号は統合の現在地の一局面、とくに地域研究を中心とした阪大の文系研究の現在地を体現しているといえましょう。ちかく、阪大の文系大学院はさらなる大きな再編を見込んでいます。阪大における地域研究・教育の発展と寄り添いつつ、本誌も歩んでいけることを期待しています。（池田一人）

私は、本誌21号までには多少とも編集に関わったので、編集後記を書いたこともあった。本号は宮原暁先生のご尽力により電子ジャーナル化が実現し、編集もしていただいた。電子ジャーナル化により、本誌はこれまで以上に多くの方の目に留まるであろう。そして本誌がさらに高い評価を得るためには、論文の質を高めていかねばならない。そのためには投稿者は日頃から着実に研鑽を積むことが必要となる。幸い、池田一人先生を中心とした勉強会に多くの若い研究者が集い切磋琢磨している。その成果が本誌を更なる高みへ導いていただくことを期待している。ともあれ、本誌22号が新たな出発となったことを会員各位と喜びたい。（高山正樹）

『アジア太平洋論叢』は、「アジア研究会」によって1991年に創刊された。その後、発行の母体は、「アジア太平洋研究会」に引き継がれ、今年がちょうど30年目である。『アジア太平洋論叢』の電子ジャーナル化は、その伝統をうまく引き継いでいけるのだろうか。実際に編集の実務に携わってみて、J-Stageでの書誌XML作成に戸惑うことも少なくなく、今号は、できるだけ紙の雑誌のイメージを保てるように心がけたつもりである。静かなスタートである。それでもフォントやレイアウトの面で、電子的な、つまりパソコンの環境に依存した箇所、不統一な箇所も多くみられる。逆に、カラーの写真や図表を掲載することが可能になったり、e-radとの連携が図られていたり、電子ジャーナルならではの特徴もある。今後、XML形式に即した投稿規定も必要になってこよう。会員の皆様には、いろいろな角度からのご助言、お叱り、そして、何よりも投稿をお待ちしている。それも手書きのものを（宮原暁）。